

「過去」と「未来」

さ東・長尾中 有馬 里南

1 「今」

今年で教員生活2年目となり、いつまでも「初めて」ではいられない年を過ごしている。大学を卒業し、1年間の講師期間を経て、現在に至る。初めは生徒に「先生」と呼ばれても振り向くことができなかつた。「有馬先生」と呼ばれ、やっと私が「先生」であることに気付く。昨年はそんな日々を繰り返していた。保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学…。今までは「先生」と呼ぶ側であったのが、急に呼ばれる側になるのだ。覚悟はしていても、なかなか慣れない。ただ、今は「先生」と呼ばれると必ず振り向いてしまう。それが私であっても、私でなくとも。私が、生徒にとっての「先生」であると、少しは思っているようだ。

2 「私と」

(1) 「国語」

昔から国語が好きであった。国語科教員がこのようなことを言っているのかわからないが、国語のどこが1番好きか聞かれると、学生の頃の私は「分かるから」と答えると思う。しかし、実際そうだったのだ。今、国語を「分かる」教科だと感じる原点を考えてみたとき、それは「読書」であるなと思った。私には小学生以降の記憶しかないが、幼いころからとにかく本を読む子だった、と母親から聞いたことがある。自分自身、思い返してみてもよく読んでいたと思う。小学生の頃は、暑い日も寒い日も、四季を感じながら自転車を漕いで近くの図書館に通っていた。小学3年生くらいだったろうか。当時の私にとっては分厚く感じた単行本の「流星の絆」を手に取り、ドキドキしながらカウンターまで持って行ったのを今でも覚えている。誰に言うともなく「私はもうこんな分厚い本が読めるんだぞ。」とアピールしていたような気がする。そして

家に帰り、いざ読もうとすると、当然ながら難しい漢字だらけで読むのに苦戦した。家にあった辞書で調べたり、親に聞いたりして、きつと飛ばし飛ばしだったろうけど、どうにか読みきった。そこに大きな達成感があったことを覚えている。このような気持ちを生徒に味わってほしいと思う。

(2) 「先生」

私にとっての先生。

今まで出会ってきた先生。

優しかった先生。厳しかった先生。

授業が分かりやすかった先生。

おもしろかった先生。叱ってくれた先生。

本当に、たくさんの先生がいる。

どの先生にも本当にお世話になり、今の私の一部となっているが、中学生の時に出会った「一緒に泣いてくれた」先生は、私に大きな影響を与えてくれた。当時、家族や同級生には分かってももらえないだろうと思っていたモヤモヤした感情。とりあえず誰かにその内容を吐き出したいという思いでいっぱい、その先生に話を聞いてもらった。普段、泣くことなどないのに、話しだすと涙が止まらない。最後まで話しきるところには、その先生の目にも涙があったように思う。先生は友だちのように話を聞いてくれ、大人として感じたことを伝えてくれた。私はその時、「先生も泣くんだ。」と思い、自分に近い存在のように感じたことを今でも覚えている。不思議なご縁で、講師期間である教員生活1年目にその先生と同じ学校で勤務したことを私は一生忘れないだろう。

3 「これから」

「国語」を少しでもおもしろいと思ってもらえるように、身近にある教科として感じてもらいたい。

焦らずじっくりと頑張っていこうと思う。

私の教員人生はまだまだ始まったばかり。